

—座談会—

『バークレー・サマーセッションに参加して』

出席者（9名）

学部長 大六野 耕作

教務主任 高橋 一行

学 生（7名）学年順

関 峻 介（4年）

田 吹 健太郎（3年）

高 尾 篤 史（3年）

築 田 直 子（2年）

簡 野 隆 之（2年）

前 田 陽太郎（2年）

古 家 士 朗（2年）

*学年は2011年度座談会当時

司会 教務主任 高橋 一行

2011年10月14日（金）実施

司会（高橋一行） 私の方から、この留学のプログラムの経緯なども話しますが、最初に学部長から大きな学部の方針を話していただければと思います。

大六野（学部長） 皆さん、今日はお集まりいただきありがとうございます。このカリフォルニア大学バークレー校のサマーセッションを始めた最大の理由は、世界の中でもあらゆる地域、国から、いまは韓国とか中国がすごく多いと思いますけれども、全員が集まってきて、要するにアメリカの学生とともに争っているというこの環境を実際に経験してもらいたい。そのことによってどう感じるかはそれぞれ個人のことで、もう1つは、同じ空間、空間は離れているんですけども、同じ時間の中で他の国の人はどういう勉強の仕方をしているのかを実際に見てほしい。そうすると日本は何をやっているのかなというのが結果としてわかるだろう。そして変な言い方をすると、将来どうしなければ勝てないか。そういうことは現実にやられて恐らくおわかりになったと思うんです。

そのような機会をぜひ作りたいということで、学部の先生方とも相談し、カリフォルニア大学のバークレー校サマーセッションの事務室に2回訪問をして、2年にわたって詳細に詰めてきました。授業料とかは、まだ両方払わなきゃいけないという課題も実は残っています。それでもほんのわずかですが幾らかお金が戻るようにということで、皆さんのところには幾らかのお金が戻っているはず。そういうものを強化しながらできるだけチャンスを広げたいと思って、このプログラムを始めたようなわけです。

司会 いま学部長から政治経済学部の大きな方針の中で、この留学をどう位



置くかという発言をしていただいたのですけれども、もう少し具体的に申し上げたいと思います。

いま話にあったように、2年前からこの企画を考えてきました。私ごとですけれども、私は、2001年に在外研究に出かけたときにサンノゼ大学に行ったのですけれども、割合バークレーから近くて、アパートをむしろバークレーに近いところに借りていたものですから、実はしばしばバークレーに出かけていて、サマーセッションのことは、高校生の娘を通わせたりというようなこともあって、そのころから知っていて、留学生も含めてバークレーの在學生に対しても、あるいは市民に対しても、これだけの規模と多様な授業で開かれている大学というのは非常に少ない。且つバークレーは、もちろんご存じのとおり非常に有名な大学ですし、地理的な条件も、つまり、サンフランシスコから地下鉄で行くことができるという条件にも恵まれて、ぜひ明治の政経の学生のためにこれを利用できないかということは、かねてから思っていました。

2年前に大六野先生と一緒に出かけまして、一緒に出かけたといっても、ご存じのとおり大六野先生の英語の交渉能力はすごく大きなものがございまして、私はただ単に隣に座って、大六野先生が向こうの学部長と交渉しているのを、すごいなと思って見ていただけなんです。大六野先生は既にボストンのノース・イースタン大学と交流を始めていたのですけれども、それとはまた違った形で何かしらの交流ができるだろうということを考えて、その中の1つとして、このサマーセッションをぜひ利用したいという思いは強くありました。

その際の目的なんですけれども、1番の目的は、既にノース・イースタン大学をはじめとして夏休みを利用した1ヵ月間の留学というのはあって、それは留学の入門としては意義があるのですけれども、もっと本格的な、つまり、日本人だけにかたまらないで、しかも1ヵ月以上の長い期間直接向こうにいて、それこそ留学なんですけれども、そういう苦勞をさせたい。ただし、その際にネックになるのが、例えば協定校の留学がそうですけれども、留年してしまう。4年で卒業できないという問題がありました。ですから、最長3ヵ月出かけて、かつ留年しない仕組み。具体的には単位認定をどうするか。あるいはゼミの単位をどうするか。そういったことをクリアしなければいけなくて、帰国してからはそのことを考えて、教授会でも了承していただいて何とかこの仕組みがつくれたので、今回募集したということです。応募してくれた学生が十数人いました。



皆さんを目の前にして申し上げるのはちょっと申しわけないのですが、正直申し上げれば、この英語の学力で出かけるのはどうかなという学生もいました。それでもいいと思ったんです。つまり、泣きながら向こうで苦勞して、もしかしたら挫折するかもしれない。でも、それでもいい経験になるのではないかと、皆さんに「ぜひ頑張って行ってきなさい」と私は申し上げました。それで実際10人を超える学生が出かけて、全員が何かしらの成果を得て帰ってきてくれたので、これは私の予想を超えて頑張ってくれたと思っています。今日はぜひ1人ひとりからどんなふうに行ったのかという体験談をお聞きしたいと考えております。この成果をぜひ来年につなげて、つまり、後輩の人たちに、今度はもっと多くの人数の学生に行ってほしいと思っています。それは可能だと思います。そのためにはこちらとしては単位認定をどうするかとか、あるいは費用が大変でしょうから、いろんな助成金の問題であるとか、そういったことも考えていきますけれども、まず皆さんの体験を後輩にどう伝えるかということが一番大きなことだと思いますので、そのための座談会として、開かせていただいたという事情です。

私の方からは以上です。順に話してもらいましょうか。

大六野 思いついた人から発言してもらって構わないと思うのね。例えばどうしてこれに踏み切ったか。そういう気持ち、行く前の気持ちでもいいし、行ってみたらどうだったのか。何がショックだったのか。帰ってきてどう思っているのかということを引きかけに話していただければいいのではないかと思います。言いたそうな顔をしているのは前田君じゃないか。

前田 じゃ、ちょっと話します。まず僕がバークレーに応募しようと思ったきっかけは、日本で英語の勉強をしているだけだと限界があるし、向こうに行くことによって生の英語、現地レベルの英語を学んで身につけたいと思って応募しました。でも、正直なところバークレーのサマーセッションという位置づけのレベルがわからなくて、最初は、しょせん夏休みにあるような授業で、楽なんだろうなと思って応募してみました。

実際向こうに行って授業に出てみると、授業をとっている人はほとんど UC バークレーの生徒で、最初の1ヵ月間は授業を聞いても言っていることが全然わからないし、先生のしゃべる速度も速いし、使っている単語も難しいし、宿題も1週間に100ページ本を読んでこいとか、毎週レポートを書けとか言われて、自分ではちょっと想像もつかなかったぐらい勉強が大変で、毎週泣きながらレポートを書いていました。でも、それをやっているうちに、段々先生の言っていることも何となくわかるし、あとは寮でいろんな友だちとかを見て頑張ろうと思いました。気づいたことは、同じアジア人の中国人、台湾人、韓国人の英語のレベルが日本と全然比べものにならないぐらい高く、それで日本ももっと英語の勉強をしなきゃいけないなということはずごく痛感しました。

あと気づいたことは、みんな英語がしゃべれて、プラスもう1ヵ国語しゃべれる人もいたので、日本人は英語をしゃべることすらできないんだなということにショックを受けました。

バークレーでの生活は、とりあえず僕はユニット2という寮に住んでいて、ルームメイトが1人いました。ルームメイトは自分とあまり合わないルームメイトで(笑)、3ヵ月間はすごくつらかったんですけど、でも、それもいい経験だったかなと思いました。

大六野 ルームメイトと合わないというのは結構あるんです。(笑)

前田 あと一番苦しんだのはやっぱり食事ですね。寮の食事は、最初の1ヵ月ぐらいは食べ放題ですごくおいしいなと思って食べていたんですけど、残りの2ヵ月間は寮の食事のにおいが鼻についちゃって(笑)、食堂に入るだけでおなかがいっぱいになるみたいな感じだったので(笑)、近くに日本のダイソーがあったので、そこでパックのご飯とインスタントみそ汁を買って、毎日食べるみたいな生活をしていました。休みの日は寮に住んでいるいろんな友だちと毎週飲み会をしたり、サンフランシスコの観光に行ったり、いろいろ楽しみました。

帰ってきて思ったことは、自分は英語力がついたというのが第1の感想で、2番目は自分に度胸がついたというのがあります。すべてを含めてなんですけど、最初のビザを取るところから、学校まで1人で重いスーツケースを運んで、電車に乗って、駅から歩いて寮まで行ったり、航空券のチェックインをすることすらやっぱり英語でやらなきゃならないので、慣れていないことを自分でやってきたから、これ以降はそういうのも絶対できるかなと思いました。3つ目は、留学は、最初はつらいけど、でも楽し



いことのほうが多いので、またどこかに留学に行きたいなと思いました。以上です。

司会 どうもありがとうございます。やはり3ヵ月間行ったことは大きいと思うんですね。その中で得られたことは随分あったんじゃないかと思います。

こんな感じで、テープのために申し上げておくと、いまは前田陽太郎君です。では前田君の次に。

関 政治経済学部4年の関俊介と申します。僕がバークレーに行くきっかけとなったことは、就職活動をしておりまして、自分なりにちょっと適当になっていたりというのがあって、それで内定を1ついただいたけれども、何となくもやもやした自分がいて、何でバークレーに行ったかと言われると、何となくでしたね。ただ、直感ではバークレーに行くんだろうなと思っていて行きました。

それで行って自分の身になったことは、大きく分けて2つあると思っていて、1つは生きる力がついたのかなと思ったんです。大げさですけども、僕はずっと実家で暮らしていて、家族に育てられてきたので、自分で生活したことも、海外に行ったことすらなかったんです。海外はバークレーに初めて行って、ひとり暮らしを経験して、最初、適当な人間なので、サンフランシスコ国際空港に着いてからバークレーの行き方がわからずに（笑）、調べておけばよかったなと思ったんです（笑）。それで「バークレーに行きたいです」と言ってみたら、BARTというものがあるんだよと（笑）。それでバークレーに着いて、重い荷物を持って寮に行ったんですね。ユニットが満席だったので、別のところに行ったんですよ。そしたら「予約が取れてませんよ」と言われたんです（笑）。でも僕、英語があまりできないので、言っていることの半分もわからなくて、とりあえず「泊まりたいです」と言ったら、泊めてくれることになって、食事がついてなかったものですから、マックを探したんです。でも「マクドナルド」って通じないんですね（笑）。「マクドナルドに行きたいです」と言っても、みんなクエスチョンマークで、でも、そこでSUBWAYと出会うことができ（笑）、ここなら日本でも行ったことがあるなということで、そしたらすごく大きいものが出てきちゃって。

大六野 向こうのは大きいよね。

関 注文の仕方もわからず、みんなから笑われたりとか、ただ、そういう経験をしていく中で、すべて自分でやったことが自分に返ってきているのかなと思っていて、自分で歩いて何でもやっていくと、新しい視野が生まれるのかなと1つ思いました。

もう1つは、やはり友だち、交友関係ですね。そういうつらい生活を1週間しまして、ユニットに空きができたということで引っ越しをさせてもらって、ユニットに行ったらルームメイトができたんです。彼は、士朗は知っていると思うけど、テリーという韓国のバークレー生だったんです。彼は4年前に自分と同じような経験をしているので、僕の気持ちがよくわかってくれて、すごい助けてくれたんです。それは、いろんな店を知っているとただだけではなくて、僕の気持ちをわかってくれている。「大丈夫だよ」と言ってくれたのがまず大きかったですね。そこから心が安定したというか、それで乗り切れたのかな。友だちというのはすごく大切だなということを思いました。

それで帰国後は、僕はいま明治大学学生交流会という活動をやっていて、今度のホームカミングデーでもイベントをやらせていただくんですけども、大きな目標とかが全く見えないとき、到達できないときに、バークレーで授業に初めて出て単位が取れるかどうか（笑）、目標が全く見えてこない、たどり



着く当てが全くないという中で、頑張れる力がついたのかなと思います。こんな目標はできないかなと思っていても、日々改善することで頑張れる力ができたのかな。それで自分でやっていくと、周りの人に感謝をすることも大事だなということ学ばせていただきました。本当にこういう機会はすごく自分の財産になっていて、場を提供してくれた先生方には感謝しています。ありがとうございました。以上です。

司会 4年生の参加で、しかも初めての外国で大変だったと思います。

大六野 僕ね、1974年にパークレーに行ったんですよ。だから、相当昔なんですけど、そのときにパークレーにはマクドナルドはなかったんですけど、ジャイアントバーガーというのがあって、TOP DOGの向かいにあったんです(笑)。TOP DOGがあるでしょう。あれの向かいにあったんですが、食いたくて、食いたくてしょうがない。買うのはすぐできるけど、そのときに向こうからの次の一言が怖くて、「何か飲みますか」とか言われたときに、それが聞けるかどうかわからなくて、ハンバーガー屋の前を20分ぐらい行ったり来たりした。入ったら、予想どおり聞くんだよね、当然ね。それが何言っているかわからないんだ。で、「イエス」と言ったり、「ノー」と言ったりしているうちに向こうが怒っちゃって、それでハンバーガーを抱えて泣きながら逃げた覚えがあります。(笑)

司会 でも食べ物は、パークレーはまだいいですよ。たくさん店があります。僕はいろんな大学に行きましたけど、大学の中にもあるし、大学の周りにもあれだけ安い店がある大学というのも少ないので、本当はもっと苦労する。地方の大学に行くと、やたら広くて、お店に行くにも車に乗らなければいけないところがありますから、その点も含めてパークレーはいいところだなと思います。

大六野 あともう1つは、インターナショナル・ハウスに半年もいたんだけど、誰か言っていたように、この食事はもう要らないと(笑)。毎週何が出るかわかっているんだよ。「うわっ、何だ、この豆！」(笑)、よくわかります。でも、あれ全米で一番うまいらしいよ。

司会 そう言われているんですよ、本当(笑)。僕もパークレーで友人が結構できたので、インターナショナル・ハウスにも時々食事をしに行ったことがあるんですよ。それで確かに皆さんご存じのとおりなんだけど、でも、ほかの大学から来た人たちは「ここはいい」と言うんですよ。

大六野 うまいと言う。

司会 それは確か。

では続けて、名前が出ている士朗君、行きますか。

古家 2年の古家です。僕が行ったきっかけは、おとしなんですけど、知り合いに1人、ある会社の社長の下でよくしてもらっているんですけど、その人がUCパークレーを出ているんです。その人に聞いたときに、その人の仕事は、日本に留学生を紹介している人材紹介業をしているんですけど、その関係で僕もいろいろ留学生に会ったことがあったんです。日本にいるネパール人とか、スリランカ人とか、そんな感じでいて、もともと海外に行きたいなと思ったんです。まだ実際に行ったことがないので、その人が出ているというのもあって、じゃ行こうかなと思って、ある程度貯金もあったので、親も「(費用を)出すから」ということで説得して行ってきたんです。多分みんなはアイハウスとか、ユニットとかに行っただと思うんですが、僕は違ったんです。その人が昔住んでいたUSCというスチューデント・コーポレーションというコープに行っただんです。



だから、僕はクロスロードと違って最初全然行ってなかったんです。全部自分でつくって、部屋もシングルで、だから最初ルームメイトがないから、友だちができないとかあったんですけど、ただスーパーが近くになかったの、しょうがないから車を持っている子を探して、車に乗せてもらったり、一番困ったのはブランケットを僕は持っていかなかったんです。5月の末だったのにすごく寒くて、しょうがないので、持っていったシャツを3枚着て、ジャケットを1枚上にかぶって、下は半ズボンしか持っていかなかったんです。お父さんに「絶対暑いから持っていなくていい」って言われたので(笑)、それを信じて行ったら、すごく寒くて。

大六野 南カリフォルニアはな。(笑)

古家 そんなことがあって最初は多少困ったんですけど、でも、あんまり困ることもなくて、一番困ったのはそのことと、あとは寮の管理人の人がすごく大きな人で、ちょっと威圧感があってあまり聞きに行けなかった。すごい大きかったですね。関さんも来たことがあると思うんですけど、すごく汚かったんですよ。キッチンなんかハエがいるのが普通で、オニオンの上にハエがとまっても誰も気にしないですし、スポンジを使って洗うと逆に汚くなっちゃうみたいな感じのところだったので、すごく困ったんですけど、それも1週間もすれば慣れて、汚い食器も使えるようになってきて、もう何でもありな状態だったんです。あとうちのところは静かにしなきゃいけない時間というのが、アイハウスとかは夜だったと思うんですけど、うちは逆で、朝8時から夜の7時まで静かにしなきゃいけなくて、何でかわからないんですけど、夜はずっと騒いでいていいというところだったので、それで毎日のように夜パーティがあったんです。それでテスト前はしょうがないから関さんのところに行って、ある程度静かなところで勉強させてもらって、いろいろ動き回っていたようなときがあったんです。

そんなこともあって帰ってきてからは、いまアルバイトが見つかっていないのが一番の問題なんですけど、ただ社長の下で、いまはちょっとのお金をもらってやっているんですけど、今度土曜日に留学生を対象にした説明会を開くということで、僕もそこにスタッフとして行かせてもらう。そういういままで特別だった留学生というのが、ちょっと近くに感じられるようになってきたのかなというのがあります。例えば早稲田に行っている1人の韓国人の子なんですけど、その子が日本語で前に出て発表することがすごく怖かったというのが、すごくよくわかるようになりました。逆に僕らも、日本に来ている外国人の人に対して、すごくやさしく接してあげることが大事なんじゃないかというのを感じられるようになりました。以上です。

司会 バークレーは結構寒いんですよ。車で1時間南に行って、サンノゼまで行くと、サンノゼは暑いんです。車で30分、1時間の距離で、あそこは温度差がすごくて。バークレーは山から風が吹いてくるので、それもあってかなり寒いんです。来年の学生のために(笑)。夏も涼しいというか、涼しいという表現のほうがいいかもしれないですけども、冬も結構寒いので、そういうのも行かなければわからないんだけどね。

大六野 昼間暖かくても、夕方からすごい冷えに冷えるからね。

司会 では次の方。

田吹 政治経済学部3年の田吹と申します。よろしくお願ひします。

僕がバークレーに行った理由はさまざまあるんですけども、僕の姉がUCLAに行っていて、バークレーにも何回か行ったことがあると言っていて、「すごくいいところだよ」と言われたので、ちょっと興味があっ



たんですけど、最初のほうはなかなか行く気が出なくて、大六野ゼミに入り大六野先生からの後押しもありまして、無事行ける環境が整って決意しました。

最初は、先ほども言われていたんですけど、何となくだったので、航空券も行く3日前に取り、ビザは4日前に届き(笑)、ドタバタの感じで、僕は花野井さんに大分迷惑をかけているという実感をしておりまして、それぐらい何となくで行きました。英語の勉強もしないで行きました。自信を持って言えます。

大六野 私も自信を持って言える。

田吹 行く前の TOEFL は 29 点でした。(笑)

大六野 エーッ、29 点！

田吹 地震の影響で、僕は大阪に受けに行ったりとか、何かドタバタ、ドタバタしてて、早くアメリカに行きたいなって、逆にドタバタし過ぎて日本にるのがいやだなって感じで逃げました。最初は知り合いの家にホームステイをしていたんですけど、その後パークレーに行って、まじめな話なんですけれど、最初の2週間は毎日がとてもショッキングで、例えば初日に布団がないとか、布団はどこでゲットするんだろうとか、それでクラスの授業に出て、自分の大学を最初に自己紹介するんですけど、みんな北京大学だの、マサチューセッツ工科大学などに行っていて、僕が明治大学と言ってもみんなわからなくて、東京大学だけ知っていると言っていたので、「ユニバーシティ・イン・トーキョーです」と言ったら(笑)、みんな勘違いしてくれて、「ああ、そうなんだ。知ってる、知ってる」みたいなことを言われて、そういう感じで逃げたんですけど、とにかく周りの人のレベルが高くて、僕は英語もできないし、普通に日本語で授業を受けてもこの人たちには勝てないだろうなと思っていて、週に2~3回は徹夜をし、人生で初めて図書館で寝るという、アイハウス(インターナショナル・ハウス)の図書館は24時間あいていたので、図書館のソファが週3回の僕の寝床で、それぐらいつらかったんです。でも、先ほども言っていましたけど、僕はすごい生命力がついたと思います。



僕は2年生のころに東南アジアにバックパッカーで行っていたんですけど、そのときも外で寝たりとか、自分は結構生命力があつたりとか、適応力には比較的自信があるので、それで何とかかなるかなと思って、みんなさっき「ご飯、ご飯」と言っていましたけど、僕はご飯はそこまで苦勞はしませんでした。僕、お米が大好きなんですけど、2ヵ月目以降はマッシュポテトが好きになってしまって(笑)、マッシュポテトばかり食べていたりとか、あとアイハウスにお米があつたんですけど、硬くて、メキシコ人のお米を炊いている人に「もっとやわらかくしろ」と言いました。(笑)

とにかくいろいろいやなことはあつたんですけど、それは全部言えばみんな何とかしてくれるんじゃないか。僕は家族に言われたんですけど、「どこに行ってもみんな人間だから、向こうから食べられたりもしないし、言えば何かしら通じる。感情がある生き物なんで、人間だから“助けて”と言ったら助けてくれるから」というふうにずっと言われていたので、僕の隣の部屋に日本語がうまいアメリカ人がい

まして、その子に僕のレポートを全部読んでもらったりとか、プレゼンテーションも全部読ませてムービーに撮って、それで1週間かけて丸暗記したりとか、ともかく僕は人をあげつないぐらい使って、クラスで一番頭のいい2人とプレゼンテーションを組んだりとか、「組んで」と言われた瞬間に、走ってその2人のところに行って、「組ませてください、お願いします」と言ったりとか、僕はみんな人をうまく使えたのかな。いかにうまく生きていくかというすべをすごく学んだような気がします。

だから、身についたことは生命力とコミュニケーション能力と、あともう1つは、パークレーに行っただけでよかったと思うことなんですけど、人脈がすごく広がったなと思いました。インターナショナル・ハウスで、学生は僕ら明大生と、ICUの子が2人いたんですけど、それ以外は社会人の方で、社会人と言っても日本のトップというか官僚だったりとか、日本銀行だったりとか、京都大学の准教授で研究生だったりとか、とにかく日本を引っ張っているような人たちと一緒に週末はお酒を飲んだり、出かけたりできて、それが僕のパークレーの一番の思い出と言っても過言ではないぐらいだし、そして今後自分につながる人脈ができたなど。それがパークレーに行行って戻って来て一番得たものかもしれません。

もちろん語学力も生きていけるぐらいにはつきましたし、人脈とか、そういう面をいろいろ持って、来年の方にはぜひパークレーに行行ってほしいなと思いました。だから、英語ができないから行かないとか、英語を勉強するには3ヵ月じゃ短いんじゃないかとかじゃなくて、むしろそれ以外に得るものがたくさんあって、そういうのをちょっと広く考えて決めたらみんな行くんじゃないかなと僕は思います。以上です。

司会 どうもありがとうございます。留学先で知り合った友人って、僕も短い滞在で知り合った友人といまでもつながっていたりとかありますから、一生つながるお付き合いができたのかなと思います。それは多分皆さんもそうなんだろうなと思います。

続けていきましょうか。

高尾 3年の経済学科の高尾と申します。僕がUCパークレーに行った理由は、去年はノース・イースタンに参加させていただいて、そのとき思ったのは、向こうの学生とも触れ合えたのですが、日本人が多かったので、結構日本語を多く使ってしまったし、あとは向こうの授業も明治大学生だけの授業だったので、宿題もそんなになかったです。だから、毎日飲んだりしたんですけど、今回UCBのを見て、自分ひとりで授業を受けてという形だったので、そっちのほうが自分にとってためになるんじゃないかなと思って参加しました。

行ってみて、結構心が何回も折れたんですけど、僕もカリフォルニアはすごい暑いイメージがあったので、半そで半ズボンで行ったんですね。そしたら空港を降りたら風が寒くて、それで心が折れたのと、あとは着いた瞬間に、サンフランシスコってアジア系がすごく多かったので、自分も現地にいる人だと思われて、3~4回ぐらい「この電車、あそこに行く？」とかすごい質問されて、着いた初日だったので全然わからなくて、何も答えられなかったというのに心が折れました。あとは授業はもちろん何を言っているか初めはわからなくて、どうしようかなと思ったんですけど、たまたま僕、経済学の授業を2つとっていたんです。2つとも同じ授業をとっているUCパークレー生の台湾人の女の子がいて、その子と仲よくなって、先生が宿題を出すときに黒板に書かなくて口頭で言うんですね。なので聞き取れなくてすごく困っていたんですけど、その台湾人の女の子が「いま何と言ったかわかる？」とか聞いてくれて、「わからなかった」と言うと、「じゃFace bookかなんかで送るね」と言ってくれて、質問の内容



とかで何回も助けてくれたりしたので、すごい助かったんです。

あとは、聞き取れなかったというのが一番大きかったので、単位が取れるかすごく不安だったんですけど、何とかして単位を取りたいなと思っていたので、とりあえずリーディングで何とかカバーしてやろうと思って、毎日2～3時とか、ほんと深夜、夜遅くまで読み込んで、帰っても復習をしていました。

あと食事面は、僕も田吹君と一緒に特に問題はなかったんですけど、ルームメイトは韓国人の男の子だったんです。その子はオーストラリアに8年間いて、すごく英語はペラペラだったんですけど、すごくいいやつで、自分が「英語は何言っているかわからない」と言ったら、「ゆっくりしゃべるから、わからなかったらすぐ言って」と言ってくれたり、本当に温かかったです。

UCBに行って本当に思ったのは、日本人はこのままで世界で大丈夫なのかなとすごく思いました。英語は当たり前じゃべれて、もう1ヵ国語もしゃべれますし、何となく日常会話はできるんですけど、授業のアカデミックな部分だと、あんまり自分の意見が言えなかったんで、そこが一番心残りだと思いました。

ただ、僕は6月下旬から行ったので2ヵ月ちょっといたんですけど、そこで友だちもできましたし、1人でゴールデンゲートブリッジとか、観光旅行に行こうかなと思って、そこでも道に迷って道行く人に「これはどこにあるんだ」と何回も聞いて、そういう生きる力は身についたのかなというのはありますね。最終的にはバークレーが終わった後に、個人旅行でアメリカのラスベガスのほうに行ったんです。それでいろんな人とコミュニケーションがとれたので、「あっ、自分は英語が身についたのかな」と思いました。ただ、帰ってきて、向こうで仲よくなった韓国人とか、台湾人の子たちともっと英語でいろんなことのコミュニケーションをとりたいたいなと思ったので、いまは英語を勉強していますね。以上です。

司会 ノース・イースタンに1年前に行って、それで翌年はバークレーというのを、政経の1つのコースにしたいなというのがあって、モデルケースとして来年もそういう学生が出ればと思っています。幾つか話をいただいて、かなりそれは共通するのではかなと思いました。

いま5人終わったところですよ。6番目。

築田 2年の経済学科の築田直子です。私がバークレーに行こうと思った理由は、入学するときに、この学校に行くことになって留学制度を調べていたらバークレーがあったんです。でも締結したばかりで、まだ何もやっていないみたいを書いてあって、事務室に行っても「今年は行ってません」と1年生のときに言われて、来年行こうと思って、1年生のときは国際交流センターでやっているマクマスター大学に行ったんですけど、さっきもおっしゃっていたとおり、周り全員が明治の人で、中国の人とバーベキューをしたり交流はあったんですけど、ほんとに日本人ばかりで、それほど英語をしゃべる機会もないまま帰国してしまっただけで、何かすごい後悔をして、だからバークレーに行ったら、周りに日本人はいないし、1人でチャレンジできるかなと思って参加しました。

行って見て、まずそれこそ布団もなかったし、いきなり火災報知器が夜中に鳴って、もう怖くて、怖くて、帰りたいと思って、最初の2週間ぐらいはほんとに毎日泣きながらで、授業が終わったら、授業のやっている意味もわからないし、「映画を見てこい」と言われて、映画を見るところすらわからないし、ほんとに帰りたいと1ヵ月ぐらい思っていました。けど気づいたら、1ヵ月ぐらいたってからは気持ちが楽になって、最後はすごく楽しかったなと帰るときは思いました。



帰ってきて思ったことは、わからなかったら「わからない」と言えば、みんな手伝ってくれるし、自分で何でもががが聞けばみんな答えてくれるから、行動力が身についたかなと思いました。まとまらなくてすみません。

大六野 いや、いいんだよ。

司会 どうもありがとう。今年は入学式がなかったんですけど、去年は入学式があって、僕は、新入生のお父さん、お母さん方と話をする機会があって、圧倒的多くの親御さんは子どもを留学させたいと思っている。多分本人も行きたいと思っているんだろうと思うんだけど、それは1年生のうちに急速にしばんでしまっているのが現状かなというおそれがあって、最初の思いを何とか、いま築田さんに言ってもらったんですが、うまくこういうふうにつながれたらいいかなと思っています。

では、行きましょうか。

簡野 2年生の簡野隆之です。バークレーに行った理由というのは、単純に言えば留学したいなというのがあったというのもそうなんですけど、自分自身が普通の生活がきらいだということが一番あって、単純に授業を受けて、バイトをしてという生活が一番いやで、このバークレーの企画があるということで参加させてもらいました。

行く前は英語なんてできなくて、しゃべることもできないし、リーディングも、ライティングもできないみたいな感じだったんですけど、行ってみれば何とかなるだろうと単純に思ったんですけど、本当に行ったら何にもできなくて、道の見方すらわからなくて、最初着いた瞬間に2～3時間さまよって、やっと寮に着くみたいな生活から始まって、それでやっとできた友だちと食事をする機会があったんです。そしたらその友だちの友だちもいて、そこで食事したら、明らかにこいつら悪口言っているなみたいなことはわかるんですけど、何を悪口言われているかわからないので、もう笑っているしかなくて、それで完全にホームシックになってしまって、出たくないなという感じになったんです。でも、何のために行ったかわからないので、勇気を振り絞り授業に参加したんですけど、授業をとったのも哲学なんていうものをもってしまったものですから、はっきり言って1ヵ月半いすを暖めていただけみたいで(笑)、もう言っていることもわからないし、読んでいる内容も理解ができないし、テストの内容も理解ができない。すべてが理解できなくて、「ああ、これなんだ」みたいな、行く前に考えていたパラダイスは何なんだろうみたいな感じだったんですけど、後半になって多少英語も聞けるようになって、コミュニケーションもとれるようになって、この1ヵ月半があったことで行っている期間はさほど苦勞がなく生活できましたし、恐らくこの1ヵ月半を超えるような苦しみはしばらくないんじゃないかぐらいの苦勞をしたので(笑)、それがバークレーに行ったことでよかったことだなと思います。



あと、僕は基本的にバークレーの生徒と結構仲よくさせてもらってて、バークレーの生徒は、自分は英語ができなくてもプレゼンテーションと一緒にやらなくちゃいけないというときに、カバーをしてくれるだけの能力があるので、この人たちはすごくレベルが高いんだなということが、本当に身にしみることができて、世界のレベルというものに間近に接することができたことが、またよかったことだと思います。

帰ってきての経験といたら、その1ヵ月半があったので、いまはそんな苦しむこともなく、普通に

英語も多少は生活できるぐらいの、旅行もできるぐらいの英語能力を身につけることができましたし、英語をこれからまたさらにやっていくだけの意欲というのは、目標になったということが、帰ってきて得たことだなと思います。終わります。

司会 哲学は日本語でやってもわからないからね。(笑)

簡野 ほんとそうなんですネ。

司会 私は、実は哲学が専門なんですけど、まあ、それでもいいやね。

簡野 それはそれでよかったです。

大六野 後で思ったのは、皆さんが科目をとるときにもう少し戦略的に、我々もそういう経験を昔しているわけよ。だから戦略的に、とりたければとってもいいけど、単位にこだわるんだったら、これはとらないほうがいいよというのを教えてあげてもよかったですという気もしたんだよ。気もしたんだけど、でも、初めから全部そうやってしまうと、その苦しみがなくなるからね。そのあたりは少しずつ、これからどういうふうにしたほうがいいか。ただ、教えたほうがいいようなことはあると思うんだよな。みんなこれを知っておけば、さっきの話じゃないけど、「パークレーは寒いよ」とかいう話もね(笑)、実はそういうことが重要なんだ。だから、そういうことはやっぱり教えておいたほうが、次にやったほうがいいと思う。つまらないことで苦労する必要はないという感じがある。

司会 最初に言っていたけれど、地理的にも非常にいいところで、随分皆さん苦労をしているんだけど、それでも空港を降りたら、すぐ地下に地下鉄が走っていて、BART ですが、BART に乗っていくとパークレーに着いて、BART の目の前に大学がある。大学の周りに寮もあるし、買物をするところもあるし、食べ物屋もたくさんあってというのは、アメリカでは極めて珍しいです。アメリカはほとんどの町が電車が走っていないですから、空港を降りてレンタカーを借りるしかないのかということもあるし、ロサンゼルスあたりだと、大学に着くまでにかなり怖いというか、身の危険を感じるようなところも多いし、そういうところがパークレーは非常に恵まれているので、皆さん苦労して、苦労しても荷物を全部盗まれるとか、そういう経験はさすがになかったでしょう。運がよかったということもあるし、皆さんが注意をしたということもあるんだけど、場所によってはそういうことも覚悟しなければいけないところもありますから、その点は比較的本当に恵まれていて、その中で苦労をする。苦労は大変だったと思うんですけども、でも、苦労ができる環境だったというふうには思っています。

最後に、これだけは言っておきたいというのがあれば。

田吹 明大前に TOP DOG をつくります(笑)。もしかしたら5年後に重要になってくるかもしれない。—— 駿河台に。

田吹 土地が高い。

大六野 田吹君が自分でやればいいじゃない。

田吹 だから TOP DOG、全部写真を撮っていますもん。15 枚ぐらい細かいところ全部撮ってきた。

司会 では、そのくらいにしましょうか。では、これで終了します。(了)

